【めむろ未来ミーティング日程5】

令和8年1月16日（金）

10:00～11:30

■参加者　11 人
■芽室町　町長、副町長、教育長、
魅力創造課参事、農林課長、
環境土木課長、政策推進課長
■記　録　広報広聴係

■対応･検討が必要な事項

①新生地域福祉館のエアコン及び駐車場整備（都市経営課）

１　開会
２　町長挨拶
３　町からの説明事項
資料１　芽室公園 Park-PFI
資料２　都市公園ストック再編計画について
資料３　新嵐山スカイパークについて
４　意見交換

(1)資料１・２についての意見交換
【参加者】
芽室公園の整備と都市公園ストック再編計画の双方に共通して伺いたい。地震を含む各種災害はいつ起きるか分からない。災害が発生した際、公園は避難場所になったり、地域住民の心のよりどころになったりする役割も担うと考える。地域ごとに指定避難所はあると思うが、状況によってはそこまで行けないこともある。例えば、公園の近くにいる時に地震が起き、その場で集まり、やむを得ず一晩を過ごさなければならないようなケースも想定される。そうした場合に、公園が何らかの形で役に立てるようにしてほしい。施設面だけでなく、物品面も含めて検討してもらいたい。
都市公園再編計画の公園再編イメージ案も見て、また、予算上の制約があることも理解している。その上で、全てでなくてもよいので、災害時に役立つ要素を１つ２つでも取り入れることを、追加で検討してもらいたい。スケジュール上、芽室公園は２年後とされているが、もし間に合わない場合でも、整備後の追加対応でも構わないので、災害対応の視点を計画に織り込んでほしい。

【町長】
貴重な意見でありがたい。町の人口は約１万7,500 人であり、全員を避難させることは現実的には難しい。突き放す意図ではないが、基本的には「自分の命は自分で守る」「まずは近隣・地域で助け合う」といった自助・共助が前提になるという認識である。一方で、町としての備えも進めている。近年の例として、防災物品の備蓄に関して防災倉庫を整備するなどの取組を行ってきた。また、資料の７ページに記載している「あいあい公園」は、平常時は遊具のある一般的な公園だが、災害時にはシェルター的に活用できる機能を持たせている。例えば、ベンチを反転させると「かまど」になるような設備など、災害時に役立つ工夫を導入している。趣旨は、こうした災害対応型の公園整備を、今後も少しでも増やしていくべきということだと理解している。費用面の制約はあるが、その方向で整備を進めていく必要があると考えている。
公園は基本的に一時避難の場であり、特に冬季は公園に集まっても有効性が低い場合がある。そのため、災害時には公園とは別に、室内の災害避難所を確保しなければならない。その観点から、例えば、体育館は近年「冷房設置」が求められる一方で、暑さ対策だけでなく寒さ対策も重要であり、総合体育館では逆に暖房工事を行うなどの対応も進めている。こうした災害対応の視点を今後も念頭に置き、しっかり整備していきたい。
また、行政だけでは対応に限界があるため、民間の力も借りる必要がある。そのため、災害協定を複数締結し、物品供給等について民間がどの程度協力できるかも含めて整理している。万一の際に迅速に対応できるよう備えたい。

率直に言えば、最も厳しいのは冬の地震である。冬季に地震が発生した場合、住民を適切に誘導し、避難所まで安全に移動してもらえるか、寒さの中で避難生活を支えられるかなど、課題が非常に大きい。悩みはあるが、必要な整備を粛々と進めていきたい。

【参加者】
ビジターセンターはそもそも何を想定した施設か。

【町長】
昨年、日高山脈が国立公園となり、ビジターセンター構想を進めてきたが、主な利用者には登山者等を想定していて、日高山脈の入り口としての機能を持たせ、例えばガイドが常駐し、日高山脈へ向かう登山の案内・同行などにつなげられるようにしたい。あわせて、モンベルのような登山用品のショップを併設することで、来訪者が必要な装備を現地で調達できる形も想定している。さらに、ビジターセンターでありながら、飲食や休憩スペースも組み込み、ショップ利用者も含めて楽しめる拠点にしたいという考え方である。これらを必須の提案要件とし、芽室公園つなぐパートナーズが複数企業を束ね、資本・資金も出して整備を進める流れになってきている。ただ、日高山脈は誰でも気軽に登れる山ではなく、プロの山とも言われているため、ビジターセンターの中身は登山に特化しすぎず、飲食・休憩を一定の中心機能として位置付ける。また、屋内遊戯施設も整備する想定であり、そうなるとファミリー層の来訪も見込まれる。また、芽室公園では夏場に噴水周辺へ多くの人が来るため、そうした利用者が休憩できる場所としても機能する。雨天時にも屋内で過ごせる拠点になる。結果として、このビジターセンターは登山だけの施設ではなく、幅広い利用を受け止める多機能な拠点になると考えている。

【参加者】
人を集めるという観点で考えると、モンベルショップ単体では、基本的にモンベル商品の販売が中心になるため、日常的な利用動機が弱く、来訪者の出入りが限定される可能性がある。一方で、ビジターセンター側に、普段から使える機能があれば、人の流れは作りやすいと思う。立地は国道沿いで大型車の通行も多く、気軽に立ち寄れる休憩所のような形に整備できれば、一定の需要が見込める。現状でもコンビニが大型駐車場を備え、実質的に休憩地点のように機能していることを踏まえると、ここでも同様の役割を持たせる発想はあり得る。例えば一晩過ごせるような機能があれば利便性は高まるが、運用・管理の課題も大きい。その点を整理した上で、可能な範囲で検討していくのがよいと感じる。温泉の整備までは求めないが、立ち寄りやすさと日常利用につながる機能を組み込めれば、集客面で効果があるのではないか。

【町長】
確かにショップ単体では、特に冬季は来客が少なく売上も伸びにくい傾向がある。そこで検討しているのが、屋内遊戯施設である。通年で利用できる屋内遊戯を整備することで、ファミリー層も含めて継続的に来てもらえないかという発想である。
また、このエリアはスポーツ公園であり、球場・体育館・プール等がある。トレーニングセンターも利用者が増えている状況である。これらに加えて、屋外に3×3のバスケットコートを整備することも、資料には明記していないが検討している。
背景として、中学生等が屋外でバスケットを遊びでやろうとしても、町内で環境が十分ではなく、東工業団地の公園にあるコートまで自転車で通っている実態がある。また、ホットボイス等でも町内にバスケットに限らず外で遊べる場所がほしいという声が出ている。そこで、民間企業とも連携しながら、3×3コートを整備できないかという考えを持っている。そのようなことで、単に町外からの集客を狙うだけではなく、町内の人にとっても憩い、遊べる場にすることに意味があると考えている。
屋内遊戯施設については、基本的に有料化する方針で考えている。参考として、空知管内の南幌町に「はれっぱ」という屋内遊戯施設があり、現地も視察したが、イメージとしては同様の方向性を想定している。同施設では、例えば町外者は300円、町内

の利用者は100円といった形で料金が設定されており、いわゆる町民割引の仕組みがある。金額はまだ確定していないものの、本施設でも町民割引のような制度を導入し、町内の方ができるだけ利用しやすい料金体系にしたいと考えている。料金に差を設けることで、収益確保と町民優先の両立を図りたい。通年利用できる施設とすることで、とりわけ冬季など来訪者が少ない時期には、町民により使ってもらえるよう、利用促進にもつなげていきたいという考えである。

(2)資料３についての意見交換

【参加者】

夏も営業するとのことだが、どの程度営業するのか。

【町長】

現時点での考え方としては、リフトを一本化し、展望台まで上げて、来訪者には景観を楽しんでもらい、景色を見ながら座れるスペース等を整備したいと考えている。また、既存の展望台は老朽化しているため、改修を想定している。一方で、頂上には水道が通っておらず、飲食施設を設けることは難しい。そのため、飲食については例えばキッチンカーを上げる等の形で対応し、展望機能を中心に上がって景色を見て、リフトで降りるという夏場の利用イメージを基本としている。宿泊施設やカフェの要望は受けているが、水道等のインフラ整備の難易度が高く、現段階ではそこまでの整備は想定していない。

また、アクティビティについては現時点では明確に計画していないが、これまで夏季は牧場として放牧に利用しており、一般利用を制限していた斜面を、今後は新嵐山スカイパークで活用できるよう検討している。放牧をやめて斜面を開放できれば、例えば山頂からマウンテンバイクで降りてくることや、グラススキーほど本格的でない形で滑ってくるなど、夏季アクティビティの可能性は出てくる。放牧利用を終了し開放することで、イベント等のソフト事業にも活用できるのではないかという発想を持っている。基本は通年でリフトを動かし、利用者にはリフト料金を支払って上がってもらう形を想定している。

【参加者】

展望台の整備については、水道や電気といったインフラを一括で全て整備しようとすると相当な費用がかかるため断念するという理解で良いか。

【魅力創造課参事】

展望台に水道が通っていないため、これまでも水があればやってみたいといった問い合わせや要望が複数あった。しかし常設の給水がないため実現できないケースが多かった。そのため、イベント時に限っては仮設設備を置き、水を運搬して対応してきた。高所へ水を上げる必要があるため、単に配管を引くだけでは済まず、ポンプで汲み上げる仕組みが必要になる。これにより整備費がかかるだけでなく、運用面でも、年2回の点検や、10年に1回程度の部品の交換など、ランニングコストが大きくなる。さらに、故障時に備えてポンプを二重化するとなると、費用は実質的に倍に近くなり、現状ではそこまでの投資が難しい。

一方で、リフトを活用した利活用の可能性は広い。例えば本州のスキー場では、夏季にリフトへ専用パーツを取り付けてマウンテンバイクを掛け、利用者と一緒に山頂へ運ぶ運用をしている例がある。また、夏季に大学の陸上部がトレーニング目的で利用するなど、スキー場の夏活用は一定の需要が見込める。

まずは財源面を踏まえ、段階的に進める必要があり、現時点では、給水等の大規模インフラ整備に踏み込むよりも、リフトを中心とした整備を優先して進めていく考えである。

【町長】

昔は「天空カフェ」として、頂上に一時的にレストランを設けたことがある。その際も、大型タンクを上まで運び、基本的にはそのタンクの水だけで運営するという形でしか対応できなかった。このような手法であれば、短期のイベントや期間限定の取組としては実施できる可能性はあるが、通年でレスト

ランやカフェを運営するとなると、給水・衛生・維持管理に加えて採算性の面も含め、端的に言って現状では厳しいという認識である。

ただ、集客状況や利用ニーズ次第では、頂上で休憩できる場があること自体は魅力的で価値が高いとも考えている。将来的な検討課題としては持ち続けるが、現時点ではそこまでの整備は想定していないということである。

【参加者】

個人の意見として非常にもったいないと感じている。水の問題だけで飲食等ができないというのは、費用がかかることは理解しつつも、せっかく施設を整備するのであれば惜しいと思う。スキー客を想定した整備であることは理解しているが、冬は空気が澄んでおり、夜景を楽しめる場所としても価値が高い。帯広市からもそれほど遠くない立地であるにもかかわらず、「水がない」という理由だけで飲食も含めた滞在の魅力が作れないのは、どうなのかと思うところがある。

また、先ほどの牧場の話については新聞でも見たが、放牧がなくなって斜面等が開放されれば、イベント的な活用も多少は可能になるのではないかと感じていた。それを踏まえて、後から追加で整備するよりも、思い切って最初から水回りも含めて整備した方がよいのではないかと思う。後から整備すれば目玉になる可能性はある一方で、最初は話題性で人が来ても、継続的に集客できるのかという点には不安もある。そうした意味でも、初期段階から魅力と機能をしっかり持たせる方向で検討してほしい。

【町長】

資料 8 ページの「基本計画の目的」の部分を説明すると、まず「あり方の骨格」とは、経営破綻後に、復活に向けて今後どのような機能が必要かを整理したものである。その後に作成した「グランドデザイン」は、想定し得る可能性を一度すべて土俵に乗せ、選択肢を幅広く並べた段階のものである。このグランドデザインに基づく概算事業費は、具体額は示せないが、極めて大きな規模となった。補助金等が付くとしても、町の実質負担としてどこまで対応できるかを検討した結果、端的に言えば、そのままでは実行できず、絞り込まざるを得ないという判断に至った。無理に進めれば、町全体の財政運営自体が破綻しかねない状況であった。

そこで今回の「再生基本構想」および「基本計画」は、イメージとして事業規模を半分程度まで縮小した内容になっている。具体的には、宿泊は見送り、温浴も実施しない。パークゴルフ場も以前はあったが、現段階では実施しない。言い換えれば、一度は大きく風呂敷を広げて整理した上で、町の負担として現実的に着地できる範囲を見極めた結果が、今回の計画である。そのため、指摘のとおり中途半端に見える部分や、最初からしっかり整備すべきだという意見があることはもっともだと認識している。ただ、現状では財源面から、いわゆるスモールスタートとせざるを得ないというのが町の判断である。町の負担をできるだけ抑えるための工夫も他に検討している。

【参加者】

この構想に基づいて進めること自体に反対するものではない。結局は水や電気といった部分の整備が鍵になるという認識。災害時に「あそこに行けばひとまず何とかなる」と思える拠点になり得るのではないかとも考える。場所としては遠い面はあるものの、シャトルバス等で輸送することも不可能ではない。

【町長】

実際、平成 28 年の災害時には温浴施設を開放し、避難・休息等の受け皿として機能した経緯がある。その意味で非常に貴重な存在であり、災害時に拠点になり得るという発想も持っておくべきだとは考えている。

【参加者】

先日、スキー場を久しぶりに利用してみたが、今年特に良いと感じたのは、駐車場からリフトに乗るまでの距離が非常に短い点である。道具の積み下ろ

しもしやすく、移動の負担がかなり軽くなった。以前は距離があり、特に子どもを連れて第二リフト方面へ行くのは大変で苦労した記憶がある。資料 9 ページ上段の写真のような新しい配置になると、駐車場からリフト乗り場までがやや離れて見える。駐車場とリフト乗り場の動線を工夫し、最初にリフトへ乗るまでの距離感をできるだけ短くしてもらえると、より使いやすくなると考える。

【町長】

リフトの架け替えも、現時点で非常に悩ましいところである。第二リフトは老朽化が著しく、運輸局も再開許可を出せないほど古いため、使用継続は難しいという判断である。現在は第一パラレル AB 線を使用しているが、このまま現行リフトを使いながら、修繕を 10 年程度かけて継続すると、概算で約 6 億円の費用が必要となる。一方で、リフトを一本に集約して架け替えを行う場合は、約 4 億 5,000 万円で済む見込みである。利便性だけで言えば複数本ある方が望ましいが、この山の規模で採算を取ることを考えると、二本整備することは難しい。そのため、一本化した上で、斜め方向に通して対応できないか検討している。また、一本化する以上は、冬季だけでなく夏季も活用し、収益性も一定程度確保しながら進める必要があるという発想を持っている。その考え方も踏まえ、架け替えの議論はできるかもしれないという段階から、現実の検討段階まで進んできた。

一方で、新コースを滑り降りた後に第一パラレルの乗り場まで約 200m の移動が生じる点は課題であり、小さな子どもにとっては負担が大きい。駐車場からリフトが近いのは利点だが、今度は下りてきた後に遠いという別の不便さが出る。この点も悩ましいが、一本化という制約がある以上、配置はどうしても現在の方向に寄らざるを得ないという事情がある。そのため、今後は可能な範囲で、滑走後にできるだけスムーズにリフトへ戻れるよう、動線や導線の工夫等を検討していきたい。

(3)その他の意見交換

【参加者】

南小学校の関係で、私は出席できなかったが、先日、ＰＴＡと運営委員会で説明会を行った。その中で、当初は令和 10 年度に統合という町からの案で進めてきたが、会員からは令和９年度に統合できないのかとの意見が出ている。もともと地域の意見を聞くということで進めてきており、運営委員会としては、９年度に行事を行い、令和 10 年度に統合という考えであるが、会員の令和９年度に統合してほしいという要望が非常に強い。そのため、町から改めて説明してもらえないかと考えている。あまりにも令和９年度に統合してほしいという声が大きく、運営委員会も混乱している。

【教育長】

地域の中では、南小学校の統合時期をめぐって大きな問題として受け止められており、様々な議論が進められていると思う。これまで、令和９年度から令和 16 年度までを見据えた配置計画に関して、意見交換を重ねてきた。昨年 10 月には、地域全体に対して説明会を実施し、アンケート結果も踏まえて整理した経緯がある。

そのような積み重ねの中で一貫して述べてきたとおり、南小学校は重要であり、町として「早く統合すべき」といったスタンスを取るものではない。保護者の意向を最大限尊重した上で、最終的には町として判断するという立場である。そのため、町として現時点で「令和 9 年度がよい」「令和 10 年度がよい」といった時期の断定は一切していない。

地域の保護者からは強い要望が出ている。封書で届く意見もあり、未就学児の保護者からは「今年 3 月までに統合してほしい」「もう待てない」という声も届いている。背景としては、来年度令和 8 年度から複式学級が生じ得る見込みがあり、2 年・3 年で複式が発生してしまう前に統合してほしいという切実な事情がある。具体的な時期の意見としては、来年度の状況を踏まえ、令和 8 年度末に統合する案を求める声や、現在内部で議論している案としての令和 9 年度の統合など、複数の考え方が併存している状況である。

現在、地域の役員の皆様が議論を進めており、１月末には一定の方向性を取りまとめ、町へ報告いただける見込みとなっている。あわせて、統合に向かうという結論になる場合には、時期だけでなく、統合に向けて必要となる事項や要望、提案も含めて報告いただける状況である。

町としては、地域が主体的に動いていることを前提にしつつも、決して地域に丸投げしているということではない。ただ、町が先に結論を固定して主導するというよりも、関係者の意向を丁寧に受け止めながら進めるべき案件であり、判断が難しい局面だと認識している。そのため、町としては極力、地域・保護者の意向を尊重する姿勢で臨んでいるということである。

【参加者】

お互いうまく通じ合っていないかもしれない。運営委員会としては、受け入れ側である芽室小側の意見もきちんと聞きたいのが率直なところである。受入側から「今年来るのか」「いつ来るのか」といった受け止め方をされる可能性もあり、まずはお互いに話し合った上で、会員に対して計画を示したいと考えていた。しかし、途中段階の情報が先に見えてしまったこともあり、運営委員会として説明が先行してしまった面がある。その結果、会員の意向としては「早く統合してほしい」という声が９割方を占めている。ただ、現実的には、教員体制や準備期間などの課題を踏まえると、早くても令和 10 年度からでなければ難しいのではないかという認識を持っているが、その説明を運営委員会側だけで行うと、先生の都合など何も知らないのにといったことで話が止まりやすい。だからこそ、町や教育委員会から、教員配置等の事情も含めて、統合時期についての考え方を整理して説明してもらい、結論として早くても令和 10 年度といった落としどころを示してもらえると助かる。そうなれば、運営委員会としても会員への報告が落ち着いてでき、次の作業に進みやすくなると思っている。

【教育長】

繰り返しになるが、先ほど話したとおり今後の方向性や意向について、今月中に報告をいただくことになっているので、それ踏まえて地域全体へ説明会等を開催し、今言っていたことも含めてお話ししていきたい。

３月中には、方向性は概ね見えてくると考えているので、その段階で町全体に対してパブリックコメント等で意見を募りながら整理を進め、８月の策定を目指す流れを想定している。その際、意図がきちんと伝わるよう、最終的には町の判断であるという点を明確にした上で進めていきたい。引き続きご協力をお願いしたい。何かあれば随時申し出てほしい。

【参加者】

若い世代の保護者は、子どもの教育環境を第一に考え、できるだけ早く統合したいという思いが強い。一方で、自分は役員として関わる立場でもあるが、別の側面として、事業や行事、運営上の準備などの都合から令和 10 年度が現実的ではないかという議論も出ている。そのため、同じ「統合時期」を話していても、保護者側は教育の観点、役員・運営側は準備や運営の観点を重視しており、論点の置き方が異なるため、議論が噛み合っていない状況が生じている。

【教育長】

これは統廃合の話になると起こり得る話であり、今後さらに背景事情や立場の違いが表に出てくる部分だと感じている。特に、これから入学を控える子どもの保護者ほど切迫感が強く、より早期の対応を求める傾向がある。

現保護者にとっては、子どもの教育という現在の課題に加え、これまで続いてきた学校の歴史や思いも抱えながら判断することになるため、意思決定が難しくなり得る。

また、子どもが卒業して一般の地域住民という立場になると、地域における学校の存在意義という観点から、学校を残したいという声が出てくることもある。仮に統合するのであれば、拙速に進めるのではなく、きちんとした形で丁寧に進めるべきだ、と

いう意見もある。これまでの歴代会長等の意見として慎重に、じっくり進めるべきだという声があることも承知しており、その声も重く受け止めたい。加えて、あと２年あるという時間を踏まえて考える意見も存在する。

そのため、指摘のとおり議論が噛み合わない局面はあり得るが、町としてはまず子どもの教育を中心に据えて考えたい。ただし、学校は地域の中にあり、歴史の積み重ねもあるため、そこを一刀両断に割り切って語れるものではない。

重ねてになるが、１月末に役員の皆様から取りまとめが示された際には、内容を丁寧に受け止め、改めてしっかり話をしていきたい。役員から「こういう意向だ」と示されたからといって、それをそのまま機械的に受け入れるつもりはない。最終的には、教育面を最優先に据えつつ、全体を見ながら町として判断していきたい。

【参加者】

自分自身もできるだけ早くが良いとは思っているが、正直なところ、令和10年度としてほしいと考える理由がある。それは中１ギャップへの対応であり、統合後の子どもたちを支えるためには、受入体制や支援の準備をきちんと整える期間が必要だと考えているからである。

子ども同士は比較的早く仲良くなれる面はあると思う。しかし、環境が大きく変わる中で、集団の中に入った途端に気持ちが不安定になり、勉強どころではなくなる子が一定数出る可能性はある。そうした子どもへの配慮や支援を含めて、少し時間を置くという説明を、町や教育委員会側からもしてもらえると、会員の理解が得られやすくなるはずである。

統合に向けて様々に動き始めている中で、子どもたちにとって優しい形、勉強だけではない部分も含めて丁寧に整えた上で進めたい。その趣旨を、会員の皆さんに対して町から説明してもらえるよう、運営委員会としてお願いしたい。

【教育長】

芽室中学校に進学した際に転校したような感覚になり、学習内容のギャップ以前にまず人間関係面のギャップが大きくなりやすい。そこを何とかしていかなければならないという課題認識は学校側も教育委員会としてもその点は織り込み済みであり、これまで、例えば小学校6年生段階で南小と芽室小の子どもたちが交流する機会を年数回設けてきた。今年度はそれを5･6年生へ拡大し、さらに今後は他学年にも段階的に広げていく方向で学校と話をしている。これは統合の議論が出てきていることも背景にあるが、仮に統合がなくても、小中一貫教育や小中連携を進める上で必要な取組である。目的は、子どもたちが学習面だけでなく、人間関係も含めて安心して馴染める環境を整えることである。統合時期が令和9年度なのか令和10年度なのか、その先がどうなるのかは別として、少なくとも今後、可能な範囲で交流を深め、ギャップを小さくする取組を進めていきたい。なお、学校間の距離、移動手段や時間の制約もあり、できることには限界があるが、それでも可能な限り交流機会を設ける考えである。これらの取組内容は、今後の説明会でもきちんと説明したい。

【参加者】

統合時期をめぐって保護者や地域の意見が割れていることについては、人口減少が背景にある構造的な問題だと受け止めている。おおよそ40年ほど前には複数校の統合が進んだ経緯があるが、当時と比べ、今は多様性を重視する時代であり、個々の事情や選択をより丁寧に扱う必要がある。そうした時代背景の違いも踏まえながら、今後の議論を整理していくべきである。現状、南小は人数が少なく、教室等に余裕がある。であれば、いきなり統合の日を迎えるのではなく、例えば南小に芽室小の子どもたちが来て一緒に授業をする期間を設けるなど、段階的に慣らしていく発想はないのかと思う。そうした取組を何年か繰り返して関係性を作り、自然に馴染ませていくのがよいのではないかというのが個人的な考えである。

何より大事なのは子どもである。統合の議論では保護者や地域の意見だけでなく、子どもたちの声も

丁寧に拾う必要がある。交流が進み「一緒に遊びたい」「もっと関わりたい」と子ども側の気持ちが育てば、統合に対する不安も和らぎ、「それなら大丈夫かもしれない」という空気にもつながるはずである。

【教育長】

子どもの考えについては、昨年 5～6 月にかけて、保護者および地域全体を対象にアンケートを実施した。子どもがいる家庭には「お子さんと相談しながらできるだけ回答してください」と依頼した経緯がある。子どもの意向も踏まえつつ、結果として保護者の意向が強く反映される面はあり得るが、事情や選択肢を説明した上で、家庭内で話し合って回答していただいたという整理である。

また、地域の意向を尊重しながら、現在は人間関係づくりを重視して、学校間の交流も工夫して進めている。南小の児童が芽室小に一方的に行くといった形に偏らないようにし、互いの子どもたちが行き来して一緒に活動するなど、双方向になるよう取り組んでいる。目的は一貫して、統合の有無にかかわらず、子ども同士の関係を少しでも深め、環境変化の不安を小さくすることである。

学校にはカリキュラムや年間行事の枠組みがあるため、その範囲の中でいつ、どの活動で交流するかを位置付け、年間の生活の流れの中で計画的に実施していく考えである。

統合が令和 8 年度末になるのか、令和 9 年度末になるのかによって、交流や準備の計画はさらに深めていく必要があることは当然念頭に置いている。だからこそ、場当たり的にならないよう、全体の工程を整理し、しっかり準備していきたい。

【参加者】

統合に関して、保護者の意見や子どもの意見、地域住民の意見が重視されるが、実際には先生方の意見も非常に重いと感じている。統合の話が具体化すると、現場はどうしても緊張感が高まり、先生方もピリピリしてくる局面があるだろう。さらに、人事異動や配置の見通しなど、自身の働き方にも影響が及ぶ可能性があり、それが心理的な負担になる面もあると思う。ただ、そのあたりまで踏み込んで考え始めると、議論が「大人の都合」の世界に寄り過ぎてしまう危うさもある。第一に考えるべきは、今目の前にいる子どもたちをどうするか、どう支えるかであり、子どもの教育環境を最優先にして判断すべきである。

そのうえで、教育は予算などお金の問題が避けられない一方、商売のように単純な効率や採算だけで割り切れない分野でもある。だからこそ、現場を担う先生方が何を不安に思い、何を必要だと考えているのかといった、教職員の見立てや考え方も意見としてきちんと重視すべきだと思う。

【教育長】

複式学級になると教員 1 人あたりの負担が増える面は確かにある。単式学級に比べて授業準備や進行が複雑になり、日々の運営も大変になる可能性はある。ただし、それが教育の質の低下につながるということにはならないようにしなければならない。教員も研修等を重ねながら、2 学年を同時に見る状況でも授業の質を確保できるよう取り組んでいきたいという考えである。

また、教員配置は「子どもがいるから学校があり、学校があるから教員が配置される」という順番で考えるべきであり、教員の異動や都合が先に立つものではないと捉えている。基本は、子どもの教育をしっかり行うことが最優先である。

一方で、教員の人事異動については、任命権者は北海道教育委員会であるため、最終的には道教委の決定に従う形となる。町としては、子どもの学びの環境を守る観点から必要な意見や要望は伝えつつも、人事そのものは道教委の権限のもとで動くという整理になる。

いずれにせよ子どもの教育が最優先という観点は外さずに進めていく。

【町長】

私も悩んでいる。設置者としての立場もあり、町として筋の通った考え方を示さなければならない。端的に言えば、南小と上美生の状況は、現時点では

感覚として真逆に見える部分があり、その整理をどう行うかも課題である。

現在は正直なところ、議事録などを拝見し、こういう意見交換が行われているのかと把握している段階にとどまっている。しかし今後は、自分としても教育委員会により深く関わり、これまでの経過や背景をきちんと聞き取った上で、どこかの時点で判断を下さなければならないと考えている。難しい判断であり、時間が無限にあるわけでもない。

だからこそ、今後は運営委員に迷惑をかけないよう、町としてこういう考え方で進めるという方針を、どこかで明確に示す必要があると思っている。そのために、しっかり準備し、責任を持って取り組んでいきたい。

南小が 40 周年という節目を迎えるのであれば、そこを一つの区切りとする考え方もあるのかもしれない。もちろん、最も望ましいのは、その区切り方を選んだとしても、子どもたちに影響が出ないシナリオに持っていけることである。ただ、その考え方を、保護者や地域の皆さんがどう受け止めるかが重要であり、そこは丁寧に見極める必要があると思う。

自分自身、保護者の方々と十分に話せていないため、今どのような意見が多いのか、正確に把握し切れていない部分がある。窓口は教育委員会であり、権限も教育委員会にあるため、現時点で自分が断定的にこうするべきだと言える立場ではないという事情もある。そのため、こちらとしても状況を十分に掴み切れていないような言い方になってしまい、申し訳なく思っている。ただ、地域や関係者の皆さんにできるだけ迷惑をかけないようにしつつ、町として責任ある判断ができるよう、これまでの経過も踏まえて整理していく必要がある。話がややこしくなりがちだが、その点を意識しながら進めていきたい。

【参加者】

新生地域福祉館には、現在、エアコンが 1 部屋にしか設置されていなく、大きな部屋にはない。設計当時はそれでも良かったのかもしれないが、近年の暑さは厳しく、現状はエアコン 1 台を稼働させ、扇風機も併用するなどの工夫で何とかしのいでいる状況である。新生地域福祉館は災害時に避難所的な役割も担い得る施設であるが、万が一災害が発生し人が集まった場合、暑さが原因で十分に使用できないという事態も想定される。施設の供用開始から 10 年程度が経過している中で、利用者の安全確保と避難所機能の観点からも、①エアコンの増設について、できるだけ早急にお願いしたい。

それともう 1 点、福祉館の西側にはゲートボール場があり、①その周辺に駐車場という名目のスペースがあるものの、実際には十分に整備されておらず、地面がへこんで水たまりができるなどして、ほとんど使えない状況になっている。せめて砂利を入れるなど、最低限の整備をしていただけないか、という話である。これまでも要望として伝えてきたつもりだが、なかなか進展がない。

今年は新生 130 年という節目もあり案内をしたが、神社側の整備は当然こちらの担当として実施する一方で、問題のエリアは町有地に関わる部分があり、こちらが勝手に手を入れてよいのか判断が難しい、いわばグレーゾーンになっている。費用の問題もあるが、現状いただいている管理費の範囲でやりくりして実施してよいのかも含めて、正直よく分からない。もし、こういう整備をしたいので使ってよいという町側の明確な了解が得られるのであれば対応もしやすいが、建物設備や将来的な維持管理、後々の責任問題につながりかねないため、現状のままではこちらの判断で勝手に整備するのは難しいという認識である。

【町長】

福祉館については、昭和 56 年の建築基準法改正以前の建物は基本的に建て替えの対象となり、新生も建て替え済みである。昭和 56 年以前の施設では、そもそもエアコンが 1 部屋もないところも多い。今後、施設を見て回る中で、同様の要望はかなり出てくると思われる。町として地域コミュニティを大事にし「集まってください」と言っているにもかかわらず、集まったら暑くてどうにもならないという状

況は好ましくない。したがって、町内全体として、地域施設の空調設備をどうしていくかを計画的に考える必要がある。今回意見を聞いたので、今後の計画の中でどのように位置付けるかを検討したい。ただ、より古い施設ではさらに深刻で、暑すぎて集まれないという実態もあるため、優先度も含めて整理して検討していく。

また、福祉館周辺の整備については、他地域からも舗装化などの要望があるが、現状の整理としては、町として原則舗装は行わないというルールで運用してきている。砂利を入れることについては、舗装ほど明確なルールがないため、例えば他工事で砂利が出るなど条件が合えば検討の余地はある。ただし、あまりにも凹凸がひどく水が溜まり、車が停められないほど機能を損ねている状況であれば、施設機能として問題であるため、そこは検討したい。

「検討」という言葉になってしまい申し訳ないが、現状の支障の程度も踏まえ、対応の可能性を考えていきたい。

【参加者】

北伏古９線の道路が毎年陥没するなど荒れてしまう。重機もトラクターも通り、通勤道路でもあり交通量が多い。通行に苦慮するため道路を広げてほしいという要望が地域の集まりの際にあった。

【町長】

こうして地域を回って話を聞くと、道路の補修要望も多い。ただ、その中でも南９線は交通量が明らかに違い、傷み方や影響の出方も大きいと感じている。また、乗用車で走る感覚と、大型車で走る感覚は全く違うという指摘も、先日別の会場で受けた。自分自身もそのとおりだと思っており、少しの段差であっても、特に荷物を積んで走行している場合には、振動や衝撃の影響が相当大きくなるのだろうと感じている。そのため、道路の要望を一律に捉えるのではなく、交通量や車種構成、物流への影響といった観点も踏まえて、優先度を整理していく必要があると思っている。

【参加者】

近くに帯広の森があり、このあたりはスケートの夏練習などで自転車で走る人が一定数いる。近隣の高校のほか、道外の大学が合宿で来ているようだ。夕方５時や６時頃に出発して走ると、帰りは暗くなることも多い。一方、こちら側は農作業の都合で、トラクターやプラウ、作業機を付けた車両の出入りが頻繁にある。そうした車両は幅も取り、死角も多いので、万が一接触のようなことが起きれば、危険は大きい。ただ、共通点もないため、お互いに取り決め等もつくれない。南７線の橋のように幅員が狭い箇所もあり、車両同士や自転車とのすれ違いが特に危険である。センターラインを引く・路肩を広げるといった抜本的な整備にも限界がある中で、どこでどう話し合い、互いに安全を確保するかが課題である。

【町長】

情報共有の方法としては、走行するコースや時間帯などを事前に把握できればよいが、どの程度把握できるかは不明である。高校に確認することで調整できる可能性もあるかもしれない。教育委員会で情報把握できるか確認してみる。

11 時 30 分終了